



新課程

[主体的・対話的で深い学び] × [指導と評価の一体化]
 ～地方創生時代を生き抜く力を育むための商業教育の在り方～

宮崎県立都城商業高等学校

教諭 久保 良太郎

1. はじめに

本校は、創立 116 年目を迎える、伝統と実績を誇る県内有数の商業高校である。学校経営ビジョンとして、「自信と誇り、高い志を持つ自立した経済人の育成を目指し、地域および県民の負託にこたえる学校の創造 ―経済の変化を察知し、対応するために学び行動し、経営活動に参画する職業人の育成―」を掲げている。二学期制を導入しており、各学科（商業科 2 クラス、会計科 1 クラス、経営情報科 1 クラス）が特色ある教育に熱心に取り組んでいる。



2. 教育課程研究指定校事業の取組

平成 30 年度、令和元年度の 2 年間新学習指導要領及び新評価の実践的な研究を科目「マーケティング」及び「課題研究」で行った。今回は科目「マーケティング」における研究成果を紹介する。

マーケティング 1 年 82 名

- ・「主体的・対話的で深い学び」を地元企業と連携し、具体的な事例を用いたケース教材やディベートなど、系統立てた学習指導の工夫改善

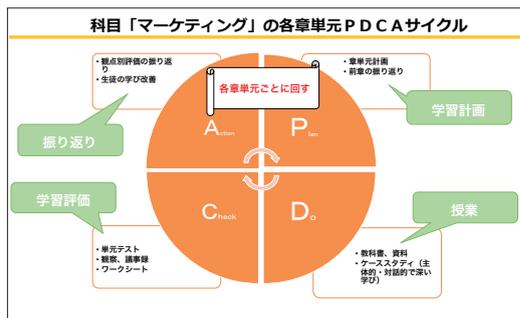
- ・平成 31 年 1 月 21 日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」を基にした学習評価の工夫改善

新学習指導要領では、資質・能力をベースに「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」、科目の目標とその具体的な内容の取り扱いが詳しく示されており、その実践を行った。

マーケティング担当者（チームティーチング）で各章ごとに教材開発を行い、週 1 回マーケティング担当者会を設定し、教材及び学習評価の検証を行った。

(1) 単元ごとに PDCA サイクル

各章・単元で PDCA サイクルを回し、学習活動を行った。P [学習計画] → D [授業] → C [学習評価] → A [振り返り・改善] を単元ごとに繰り返すことで、「学びに向かう力」の資質・能力を常に意識した。



(2) ケース教材を用いた授業展開

本校生徒は、多くが地元企業に就職する。そのために在学中、マーケティングに関する具体的な事

例を学習するため、7企業に協力依頼し、各章に1つずつのケース教材等を作成した。マーケティングにおける課題解決能力を育成するために、地方創生の視点から学習活動の充実を図った。生徒達の興味関心・やる気を引き出すために、企業講話や企業見学等を実施し、各企業のケース教材等を交えながら授業を展開した。

また、企業との調整が上手くいかない時には単元の入替えを行って柔軟に対応した。以下、事例を示す。

下記事例1～6 [ケース教材] はこちら ▶



事例1) [ケース教材] → [企業のストーリーテリング] → [質問会議フィッシュボウル形式]

宮崎上水園の方々をお招きし、問題解決のために生徒が質問と応答のみで進め、解決策を探っていく対話手法を行った。生徒達はサークルになり、宮崎上水園の生産者の想いをストーリーテリングで共有し、対話を深めるためにフィッシュボウル形式で、企業のマーケティングを深めた。



▲ 質問会議の様子

事例2) [企業講話] → [アイデア創出] → [5W1H] → [ポスターセッション]

地元企業、宮崎高砂工業株式会社（瓦・レンガ製造）の実例を通じて、製品の改良についてどのような工夫がされているのかを理解し、ワークシートに記入し整理させる。

- ・配布されたミラクルワードカード（電通開発）から「レンガ」と組み合わせると発想が広がるカードを選択し、その理由を考える。
- ・「レンガ」の新用途の開発に5W1Hマップの作成をグループで行い、その中からワードを1つ選択し、意見交換を行いながら対象を明確にしていく。

事例3) [ALT講話] → [フォトランゲージ] (英語科ALT連携) ストアコンセプト

外国のストアコンセプトを考えさせ、日本のストアコンセプトで足りない点や商品管理を理解した上で、消費者の動向に立って他国の商習慣について考察や討論を行った。

事例4) [ケース教材] → [企業見学及び講義]

事前に訪問企業のケース教材で学習し工場見学や、企業で取り組んでいるマーケティング活動に触れさせ、体験的な学びを行った。

事例5) [ケース教材] → [CM企画シート] → [プレゼンテーション] → [CM改善]

大まかなCMの概要（企画）キャッチコピーを考え、場面や絵コンテの概要を記入、グループで考えたCM企画を教員へプレゼンテーションし、その後教員が質疑を行い、企画を改善させた。

事例6) [ケース教材] → [コンセプトシート作成] → [プレゼンテーション] → [パブリックディベート]

答えのない時代においてYES、NOははっきりつかない場面がマーケティングでは多い。そのためパブリックディベートという手法を用いて、企画提案型のディベートを実施した。質疑等を繰り返し、試行錯誤を行いながら再提案を行う方法をとった。さらに、これまでのマーケティングの学びを活用して、討論を行うことを意識させた。

3. 学習評価の方法

(1) 平成31年1月21日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」を基にした学習評価の工夫改善

観点別学習状況の評価を、各章単元でこまめに行うことにより、早い段階で生徒へフィードバックすることができ、次の学びへ向かうよう生徒の指導改善につなげた。評価に労力を要さないよう、なるべくシンプルな評価を心がけた。

a. 「知識・技術」

単元テストとワークシートで学習評価を行っている。定期考査のように事後の学習評価に終始することのないよう、実教出版の評価テストを有効活用し、各章で単元テストを行った。時間割を横並びに設定し、クラスによって差が無いようにも工夫した。生徒に相互採点をさせ、教員が確認する形への変更を行った。各章の単元テストは平均70点程で、理解できている生徒とそうでない生徒の知識技術がわかった。しかしながら、単元テストは、初期段階でこそ生徒達は緊張感を持ってその範囲を学習していたが、回数を重ねていく中で徐々に慣れが生じてしまい、生徒への意識付けに苦勞した。

欠席等の生徒に対しては本校の定期考査の規定に沿って評価を行っているが、煩雑さがあって現在検討中である。

b. 「思考・判断・表現」

ワークシートで学習評価を行っている。これまでの知識を活用し思考できる問いの設定を行った。例えば、各単元で学んだ内容を、科学的な根拠（統計データやビジネスのフレームワーク等）を用いて経営者の視点から多角的に考えさせることや、深い学びへと向かわせるように工夫した。

[ワークシートはこちら ▶](#)



c. 「主体的に学習に取り組む態度」

下記QR資料は、平成31年1月21日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」の資料である。二つの側面のうち、①【粘り強く学習に取り組む態度】については、座席表を用いた観察シートや議事録で記録した。また、②【自ら学習を調整する態度】については、各単元の振り返りを記述させ、評価を行った。診断的評価をしないことを念頭に置き、一時的な態度では評価しないことが大切である。部活動の日誌のイメージを持たせて記述させると、生徒もイメージしやすかった。

[報告資料・観察シート・振り返りシートはこちら ▶](#)

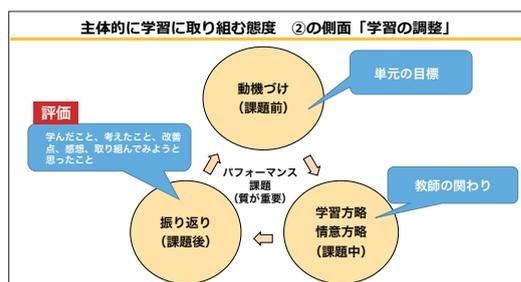


①の側面－観察評価－

座席表と観察シートを用いながら、教卓から全体を見渡し、積極的に取り組もうとしているか評価を行い、各グループで指導を行いながら評価を入れている。観察のみでは評価しづらい点もあり、何を対話しているのかなどを記録するシートを配布し総合的に判断している。

②の側面－振り返り－

課題前では生徒たちに対する動機づけを行う。課題の最中では、全体への投げかけや生徒個人へのアドバイスによって生徒との関わりを持ちながら、学習方法や学習に対する気持ちの面を指導している。課題後は、単元の活動を通して自らを客観的に見つめながら、振り返り改善を図ろうとしているか記述させ、次の学びに向かうことができるよう促している。教員の関わりが重要なポイントで、課題の最中に関わりを怠ると、後の振り返りの記述が希薄になることがあり、評価しづらい状況がうまれた。



▲資料：自己調整学習の成立過程 著者伊藤崇達（一部改変）

※自己調整学習プロセスの核心は、「予見（見通し）」「遂行と意思のコントロール」「自己省察（振り返り）」の各段階を確実に進めることである。このモデル図は、単元の目標、方略、振り返りをそれぞれの段階に明確に位置付けており、実践を構想しやすいものとなっている。パフォーマンスの成果は、「振り返り」において包括的に現れやすく、評価のアプローチの一つとして有効なものと考えられる。

（2）観点別学習状況の評価

各単元平均7時間の学習内容に対して、4回学習評価を行っている。第一次は約4時間をかけ、教科書を基本に、その活用事例等を学習し、各章で単元テストを行う。第二次は約3時間をかけ、第一次で学んだ学習を、地元企業等を事例に、ビジネスのフレームワークや対話手法を組み合わせながら「主体的・対話的で深い学び」の展開へと進めていく。各単元で評価を行っているので、必

要最低限の評価としている。重要なことは、単元ごとに生徒へフィードバックを行い、生徒自らが評価の内容を改善し、次の単元の学びに向かう力を育成することと考えている。

評価 方法 次程	主体的に学習に取り組む態度 (30点)	思考・判断・表現 (30点)	知識・技術 (40点)
	観察 記録シート	ワークシート 振り返り	ワークシート
第一 次			35
第二 次	10	5	20
総 括	B		A
評 定	4		

▲ 単元ごとの評価シート例

a. 活動ルーブリック

ケース教材を中心に、パフォーマンス課題の評価方法として活動ごとにルーブリック評価表を用いている。努力を要する生徒については、その手立てを記入し、授業前に評価内容を生徒に示している。1年生では評価慣れていないことから、シンプルに3段階の評価基準で行った。

ルーブリック評価表はこちら ▶



4. 観点別学習評価の成果【○】と課題【●】

- 単元のまとまりの中で、ルーブリック評価3段階の評価基準「A(15)」「B(10)」「C(5)」とし、1年生がイメージしやすい評価とした。
- 日々の評価を行う中で、記録に労力を要さないシンプルなルーブリック評価表を心掛けた。
- 3観点は連動性があることに気付いた。「C A A」や「A A C」は無い。
- 生徒アンケートから信頼性や妥当性のある評価結果になった。
- 評価の幅が広く、矛盾が生じている。(ABCそれぞれで5点ずつの幅があり、クラスの平均点が5～8点が開くことがある)
- 3観点をを行う上でのカッティングポイント(「A」「B」「C」の評価の分かれ目)
- 「C」に対する生徒の手立ての工夫、Cをとる生徒はとり続ける傾向(個人面談や他教科との連携等を行い、改善に取り組む必要がある)

5. マーケティング 成果【○】と課題【●】

- 教科書の学びを活用することを意識し、生徒

の興味関心が薄れることのないよう様々な授業展開を考え、地元企業のケース教材やディベートを取り入れ、協調学習を行うことができた。

- 育成する人物像から評価規準の設定を行い、ルーブリック評価等を活用しながら、ペーパーテストに頼らない単元ごとの観点別学習状況の評価を取り入れ、生徒が次の学びへ向かうことができるよう、単元ごとにフィードバックを行った。
- 定期考査から単元テストに変更し、生徒へアンケートをとった。その結果、82名全員が単元テストを良いと答えた。その理由は、単元ごとなので何を学べばよいか具体的にイメージできることなどがあげられた。
- 「思考・判断・表現」での評価については82名中7名が不適切と答えた。その理由として「書いた量より質」「グループで活動しているのに評価が違う」「何でこの評価なのか理由が知りたい」「Aをとった子の具体例を示して欲しい」などである。
- パフォーマンス課題の、問いの設定が不十分だった。その結果、「思考・判断・表現」や「主体的に学習に取り組む態度」の評価が曖昧になることがあった。

6. おわりに

地元企業や地域と連携することにより、魅力ある地域資源に気付くきっかけとなり、新たな価値を創造し、ビジネスを展開できる力を育成することができる。商業の見方・考え方を働かせながら、マーケティングにおける資質・能力を身につかせ、将来に対する不安を自信に変えるような職業人の育成に取り組んでいきたい。

令和4年度より新学習指導要領が実施される。学校がチームとなり経済の変化を察知しながら、育成すべき資質・能力や地域・生徒の実態に沿ったカリキュラムマネジメントの構築を行い、学習・指導方法及び学習評価の工夫改善に一層取り組んでいきたい。